

# インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)

## 目次 contents

平成25年度 共用品推進機構事業計画	2
大阪「バリアフリー2013」開催！（金丸淳子）	3
セレブリティの等身大フュギュアを堪能 「マダム・タッソー東京」がお台場にオープン！（高橋玲子）	4
第2回ワールド・アクセシブルデザイン包装セミナー報告 （石崎奈保子）	6
AD関連JISの改訂報告（水野由紀子）	8
随想 私と共用品第63回 取って付き文鎮と30cm定規（中村春基）	9
子どもが主役の町「キッサニア」（清水美恵）	10
<事務局長だより> 続ける重み（星川安之） 共用品通信 奥付	12



# 平成25年度 共用品推進機構事業計画

## ～共用品・共用サービス普及に関する

## 更なる充実と飛躍を目指して～

平成25年度（平成25年4月1日から平成26年3月31日まで）に共用品推進機構が行う主な事業の内容は以下の通りです。

### ～事業の趣旨～

共用品・共用サービス（高齢者・障害のある人々等日常生活に不便さのある者に対しても利用しやすいよう配慮された製品及びサービスをいう。以下同じ。）の調査研究を行うとともに、共用品・共用サービスの標準化の推進及び普及啓発を図ることにより、製品及びサービスの利便性を向上させ、高齢者・障害のある人々を含めた全ての人たちが暮らしやすい社会基盤づくりの支援を行うことを目的とする。

### ～事業の内容～

#### 1. 調査研究

より多くの人々が、暮らしやすい社会となるために必要な事項を明らかにするために、ニーズ調査、製品・サービス・システムに関する配慮・考慮点の基準及び普及作成に関する方向性の検討を行う。

#### (1) 障害児・者／高齢者等のニーズ把握システムの構築

製品・サービス・システム等に対して、障害児・者、高齢者のニーズを把握、確認するためのアンケート調査、ヒヤリング、モニタリング調査等をシステム化し、製品・サービス・システム供給者と、利用者が連携できる効率的な仕組みについて考察し、恒常化できる仕組みの案を作る。

- 1) 障害児・者／高齢者等の日常生活環境における不便さ等の実態把握（調査方法）の構築
- 2) 共創システム及びモニタリング調査システムの構築

#### (2) 共用品・共用サービスに関する配慮基準体系の構築

障害児・者、高齢者等の製品・サービス・システムに関する実態調査並びにニーズ調査で明らかになった事項に関して、製品、サービス、

システムにおけるそれぞれの分野での、共通した配慮点の項目を整理し、標準化すべき事項の抽出、標準化の体系図の作成、市場規模対象品の確定の元とする。

#### (3) 共用品・共用サービス普及方法の検討

開発・販売・市場化された共用品・共用サービス・共用システムを、広く普及させるための5W1H及びPDCAサイクル（plan-do-check-act cycle）が廻るかの検討を行い、有効且つ効率的な方法を構築するための検討を、データベース、展示会、講座、市場規模調査、国際連携等、24年度までに実践してきた事項を基に行う。

#### 2. 標準化の推進

高齢者・障害者配慮設計指針（アクセシブルデザイン）の日本工業規格（JIS）原案の作成及び国際規格の作成を行う。また、国内外の高齢者・障害者配慮設計指針の規格に繋がるための調査・研究を行う。

#### 3. 普及及び啓発

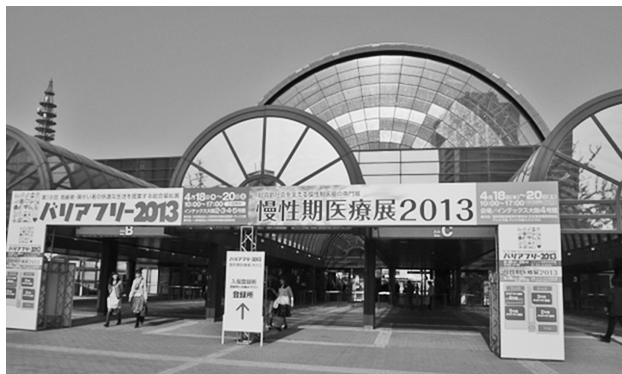
開発・販売・市場化された共用品・共用サービス・共用システムを、広く普及させるため、データベース、展示会、講座、市場規模調査、国際連携等、24年度までに実践してきた事項を元に行う。

- (1) 共用品普及のための共用品データベース維持・作成・発展
- (2) 共用品・共用サービス展示会の実施
- (3) 共用品・共用サービスに関する講座の実施
- (4) 施設における共用サービス・共用品のあり方に関する普及・啓発
- (5) 共用品市場規模調査
- (6) アジア関連機関、高齢者・障害者配慮調査及び関連機関との協議
- (7) 共用品・共用サービスに関する情報の収集及び提供

# 大阪「バリアフリー2013」開催！

## ～NPO法人共用品研究会関西が「片手で使えるモノ、集めました。」をタイトルに出展～

4月18日（木）～20日（土）、インテックス大阪において、第19回高齢者・障がい者の快適な生活を提案する総合福祉展「バリアフリー2013」が開催された。



(写真：会場入り口)

2006年には共用品推進機構も共用品を出展し同展示会とは連携を続けてきたが、今年、機構個人賛助会員の中島 巖さんが参加する「共用品研究会関西」が、片手で使えるモノだけを展示したブースを出展した。

これまでのイベントなどへの出展では、共用品をテーマごとに数多く並べられるように知恵を絞ってきたが、今回は「片手で使える」というテーマだけに焦点を当て、共用品を選定した。一点一点に説明カードを置き、製品が重ならないように陳列、来場者がゆっくり手に取って見られるようにするなど、中島氏の工夫が見られた。



(写真：ブース「片手で使えるモノ、集めました。」)

片手が使えないというのは、例えば、けがなどで一時的に片手しか使えない場合、体のマヒやリウマチなどで片手しか動かせない、また、片手を失った場合などがある。



(写真：ブース「片手で使えるモノ、集めました。」)

出展した製品は、片手で脱ぎ履きできるくつ、片手で開閉できるふた付き容器や、ボタンをとめたり外したりする動作を片手で行うときに補助するような道具など全部で35点。病気やけがではなく、例えば荷物を持ったときなども片手しか使えないことは多いため、これらの製品は便利に使える製品としても役にたつものばかりだ。向かいのブースには「(社福)大阪府肢体不自由者協会 自助具の部屋」が手作りの片手で使えるモノを出展しており、この手作りの製品が市場に乗った暁には、共用品研究会関西のブースに展示されることであろう。

今回はテーマを「片手で使えるモノ」一つにしたことで来場者に理解しやすくなり、記憶に残る展示になったのではないかと思う。欲しい物の情報を必要とする人に届ける、共用品推進機構の基本を考えさせられる展示会だった。

(共用品研究会関西)

<http://www.kyoyohin-kansai.org/>

かなまるじゅん こ  
(金丸 淳子)

# セレブリティの等身大フュギアを堪能 「マダム・タッソー東京」がお台場にオープン！

(株) タカラトミー たかはしれいこ 高橋玲子

(公財) 共用品推進機構 もりかわみわ 森川美和

2013年3月15日(金)、東京・お台場(デックス東京ビーチ)に海外・日本のセレブリティの等身大フィギュアを展示する「マダム・タッソー東京」がオープンした。

「マダム・タッソー」はマーリン・エンターテインメント(本社:イギリス)の人気アトラクション施設として、世界9カ国、13か所で展開され、各国のセレブリティと触れ合うことができる「体験型のアトラクション施設」である。

## ◆自由に触れることができる等身大フィギュア◆

等身大フィギュアの周囲には、柵やロープなどが設けられていないため、実際に触れたり記念撮影をしたりすることができる。また、リピーターにも楽しめるように、1年に1回新しい等身大フィギュアを入れたり、衣装を変えたりする。

今回は、(株)タカラトミーの高橋玲子さんと共に内覧会に参加した。

視覚に障害のある高橋さんの視点で、「マダム・タッソー東京」の楽しみ方をナビゲートする。

(森川美和)

## ◆近くて遠かった世界に初めて触れる喜び◆

等身大の有名人フィギュアに自由に触れることができる——そんな夢のようなアトラクション施設が東京にもできると聴き、「マダム・タッソー東京」のプレス向け内覧会に混ぜていただきました。

いちばん身近にあるはずなのに、実はほとんど知らない物。目の見えない私にとって、それは「人々の姿」なのではないかと思えます。ガイドをお願いする際の人の腕など、特別な場合にその身体のごく一部にそっと触れることはできても、あるいは、手の届く範囲で自分の身体に触れることはできても、他者の身体に自由に触れることは通常タブーであり、かなり幼いころから、暗黙のうちに望ましくないこととされ

てきました。

視覚障害者、特に全盲者にとって、「触れる」ことは、想像力を介さずにその物の形を具体的に実感させてくれる唯一の大切な方法です。しかし、「触る」ということは見ることと違い、接触する相手(物)に力が加わり直接影響を与えてしまうこともあって、社会的に許されない場面が多く、いつしか視覚障害者自身が、「触って世界を知る」ことに対して臆病かつ消極的になってしまっているのが現状ではないかと思えます。



(写真)係の方に「顔などもどンドン触ってください」と言われ、おそろおそろ触れる高橋さん。

近年では、特に視覚障害者に、彫刻などその展示物の一部の触察を許可してくださる美術館も増えてきました。それは私たちにとって、これまで想像することさえままならなかった新たな世界の発見の機会であり、ほんとうにうれしいことです。

しかし、芸術作品は、人の姿の彫刻であって



もアーティストの感性の産物であり、サイズや姿が「実在する人間」に近いということは通常問題にはされません。ところが、「マダム・タッソー」にあるフィギュアは等身大であるだけでなく、形もポーズも、身に付けている衣装やアクセサリーまでが「実物」なのです。そして、それは知らない「だれか」ではなく、その名ばかりか声や経歴まで知識としてあるのに実はこれまで全く姿を知らなかった有名人ばかり。しかも、ただの立ち姿ではなく、皆がその職業や役割を遂行中の、いちばん「知られている」姿でそこにいて、自由に触ることができるのです。

千代の富士の化粧直し姿や初めて触れて知るまげの形、石川遼のスウィングや踊っているマイケル・ジャクソン、スケート靴で演技中の浅田真央、自転車のかごに乗ったET、バイクに乗るトム・クルーズ、ヴァイオリンを弾く葉加瀬太郎、一本足でバットを構える王貞治の「背番号1」……。それらの一つ一つが、私にとって、「これまで言葉でしか聞くことのできなかった世界にようやくほんとうに出会えた！」という大きな感動と喜びでした。



(写真)「ETってこんな顔だったんだ」とETのフィギュアに触れる高橋さん

しかし、多くの目の見える人は「マダム・タッソー」へ写真撮影を目的にくることになります。本物そっくりのフィギュアたちと肩を組んだり、そっと身体を寄せたりという関わり方が一般的で、フィギュアと向き合いじっくり触る、後ろに回ってフィギュアの背中までを触察する……といった行動は、時間も長くかかりすぎるうえ、かなり奇異な姿として一般の人々の眼には映るでしょう。



(写真) 王貞治の背番号に触れる高橋さん

ぜひ、せつかくのこのようなアトラクション施設では、年に一度でも、視覚障害者が周囲の目を気にせずにじっくり見学できる機会をいただけたらうれしいです。一つ一つのフィギュアの短い説明をカードにして、すでに触ったものとそうでないものとは簡単に整理しながら触察していけるようになっていけるととてもいいと思います。

また、その際、高いところにいるフィギュアや手前に情景物があって手の届きにくいものなどは、触りやすいように、可能な範囲で少し工夫をしていただけたらさらにうれしく思います。

そして、そのような機会を通して、視覚障害者だけでなく、目の見える人たちが、「タブー」ではない触感覚のおもしろさを発見することができたら……と私は願っています。

(高橋玲子)

The images shown depict wax figures created and owned by Madame Tussauds.

#### 「マダム・タッソー東京」施設概要

住所：東京都港区台場1-6-1

デックス東京ビーチアイランドモール3F

(営業時間10:00~21:00)

入場料：当日窓口料金

大人(中学生以上対象)1,900円

小人(小学生以下)1,500円/3歳未満無料

ウェブサイト:

<http://www.madametussauds.com/tokyo/default.aspx>

e-mail: [info@madametussauds.jp](mailto:info@madametussauds.jp)

(返信までに時間を要する場合がございます。)

電話：03-3599-5231 (10時~19時)

# 第2回ワールド・アクセシブルデザイン包装セミナー報告

(公社) 日本包装技術協会国際部

いしざきなほこ  
石崎奈保子

ISO/TC122/WG9 (包装・アクセシブル包装デザイン) の会議に先立ち、オランダ包装協会(NVC) 主催による、第2回ワールド・アクセシブルデザイン包装セミナーが、2013年3月5日、開催都市は、チーズの産地として有名な、オランダ・ゴダ。13世紀から続く中世の面影が残る、童話に出てくるようなかわいらしい街である。ゴシック様式の市庁舎を中心に、円形に広がる広場の周りには、古い建物と少しのお店がこじんまりと佇み、大変風情がある。が、街で見かけた人と言えば、自転車に乗った現地のオランダ人くらいで、東洋人など一人も見当たらない。夕食時にもかかわらず、レストランもひっそりだ。正直、このような街で、「ワールド」と名のつくセミナーに、一体何人集まるのだろうかと少し心配になった。

そのような心配をよそに、会場のベスト・ウェスタンホテルには、7カ国(日本、韓国、米国、英国、オランダ、ドイツ、スウェーデン)より34名が集まった。オランダ包装協会事務局長のマイケル・ニュースティーク氏が、オープニング時に、「アクセシブルデザインについて“Inform, Learn, Explore!”(情報を提供し、学び、探求しよう!)」と呼びかけると、ベネルクス代表のジャーナリストは、さっそくツイッターで発信していた。

講演時間は、ひとりあたり質疑応答を含めて30分。9名のスピーカーが、代わる代わる沢山の写真や包装サンプルとともに、英語で小気味よく講演を行った。日本女子大学の佐川賢教授による「包装におけるアクセシブルデザイン概論と世界におけるニーズ」をトップバッターに、ミシガン州立大学(米国)やトウェンテ大学(オランダ)の教授らが、学問・研究の視点からアクセシブルデザインを紹介。

オランダ、英国からは、デザイナーやコンサルタントらが、開けやすさの研究・応用の成果を発表。スウェーデン、韓国からは、研究者らが、パネルテストやアクセシブルデザイン普及

の重要性を再確認。さらに企業からは、ファイザー製薬(ドイツ)と、コカ・コーラ(東京開発センター・シニアエンジニア、猪俣学氏)より、それぞれ包装の研究・成功事例が紹介された。



(写真: 日本女子大学の佐川賢教授の発表)



(写真: セミナー風景)

以下、いくつか興味深い海外からの発表内容を一部ご紹介したい。

## ■「医療用包装におけるアクセシブルデザイン」

ミシガン州立大学・包装学科教授

ローラ・ビックス氏

ミシガン州立大学の包装学科は、学内のLAC (Learning and Assessment Center: 救急医療の状況をシミュレーションによって研究するセンター) と共同し、医療現場で使われる包装の研究を行っている。シミュレーションによる研究の結果、救急隊員や医師は、現場で「ほとんど片手で対応していることが多い」ということがわかった。さらに、救急車や手術室など



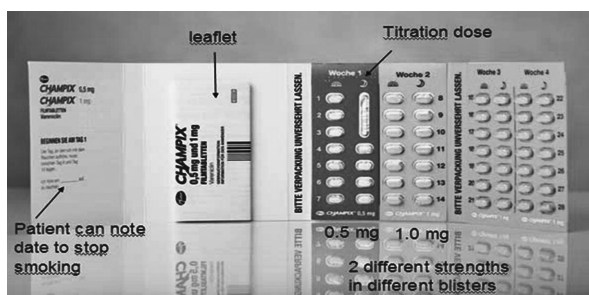
の医療現場は、動けるスペースが限られており、暗がりの中での作業が強られる。究極的に言えば、「視覚を使わない状態で、マルチタスク（複数作業）が強られる」というわけである。実際、シミュレーションビデオには、救急隊員が、差し迫る時間との戦いの中で、患者をなだめたり過去の病歴を聞き出したりしながら、体を捻じ曲げて、包装を開けたり置いたりしている様子が映し出されていた。このような状況下では、医療用包装の識別性・開封性の向上は必至である。さらに、狭い救急車の中で、破れやこぼれが生じないように、安定した形状維持も設計の上で考慮に入れなければならない。

### ■「Champix®ケーススタディ」

ファイザー製薬（ドイツ） ロバート・ウィンター氏  
Champix®という禁煙薬（錠剤）の包装事例の紹介が行われた。

2007年の調査結果によると、約50%の患者が処方された薬を飲み忘れ、約30%の患者が一連の治療を終えないうちに薬をやめてしまい、約25%の患者が実際の処方された分量より少ない量を飲んでいるという。

こうした処方を順守しないことが原因で、米国では毎年12万5,000人が死亡しているという。この現状を改善するために、包装形態を財布型（縦長の財布のように展開して使用する形態）に変更。メモ機能を付加し、禁煙日などの重要日程を書き込めるようにした。



（ファイザー製薬、包装写真）

また、地域ごとに必要な重要情報を盛り込んだ説明書も添付し、さらに、錠剤の種類の違いを、包装のベースカラーを2色で示した。全体的に包装の高級感が増し、薬の効果が上がるとともに、売上げも向上した。

### ■「韓国のアクセシブルデザイン包装」

KATS韓国技術標準院 JK・キム氏  
韓国は、日本のJIS S0021:2000をもとにKS A5561-5:2009「高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器」を策定し、最近ではチョコレートや化粧品のパッケージに点字が付加されるようになったが、社会全体としてアクセシブルデザインが普及しているとはとても言い難いという。その証拠に、道路に付けられた点字ブロックの先には柱が待ち構えている、という場所がまだあちこちに見受けられる。



（写真：韓国、点字ブロック現状）

最後に約1時間、参加者全員は5グループに分かれ、チームごとに与えられた包装の包装改善を提案する、というワークショップを行った。私のグループは、コンサルタント（英国）、デザイナー（オランダ）を含む6人で構成され、マイクロサイズのメモリーチップが入った、小さくて開けにくいブリスターパックの改善がテーマとして与えられた。何しろ小さい割に高額商品であるから、簡単に開けられるような包装にすればよいというものでもない。考えたあげくの結論は、チップそのものには小さな板紙包装を用いるが、販売時には盗難防止のために自販機を使用するというものだった。開けやすさよりも、商品の取り出しやすさを追究してみたが、アクセシブル性が高まったかどうかは疑問である。アクセシブルデザインの難しさを体験した1日だった。



（ワークショップ作業風景）

# AD関連JISの改訂報告

## 1. はじめに

1999年発行のアクセシブルデザイン関連JISである「消費生活製品の凸記号表示 (JISS 0011)」がISOで審議され、国際規格として発行されてから2年あまりが経過した。この国際規格ISO 24503 (Ergonomics-Accessible Design-Tactile dots and bars on consumer products) はJISS 0011をベースとしているものの、国際的な状況も加味した結果、原案に多少の修正が加えられている。そこで、改訂時期が来たことをきっかけに、旧JIS規格を見直し、国際規格に合致させる作業が行われた。

JIS改訂の議論のため、共用品推進機構では委員会(改訂JIS ワーキンググループ)を設置し、一年間にわたって検討を行った。委員会では、改訂のベースとなる国際規格のよい点を積極的に取り入れつつ、国内での旧JISの運用実態を最大限に尊重する形で議論が進められた。

## 2. 旧JISからの主要な変更点

### (1) 規格の名称

旧規格の名称は「消費生活製品の凸記号表示」であったが、「消費生活用製品における凸点及び凸バー」と修正された。これは、アクセシブルデザインの考え方が社会に浸透するにつれ、凸点・凸バー以外の凸記号が広く使われるようになったことから、本規格の扱う範囲を明確にするためである。

### (2) 凸点を表示する操作部

凸点を表示する操作部は、旧・新JISともに、主要な機能をスタートさせる操作部及び操作の起点となる操作部としており、この点に変更はない。ただし、電源ボタンの取り扱いについては修正が加えられた。つまり、旧JISでは「電源ボタンは、その形状、大きさ、材質、位置などの手段で他の操作部分と区別できるようにし、凸表示

を省略する。」としていたのに対して、新JISでは「独立した電源操作部が、形状、サイズなどによって触覚で認識できない場合には、凸点は電源操作部に表示することが望ましい。」とされた。これは、凸点を表示する場所は、より根本的な機能を開始させる部分にすべきとの趣旨である。新規格では旧規格との整合性を維持するため、「電源操作部と基本機能を開始させる操作部との形状及びサイズが酷似し、かつ、近接している場合には、電源操作部の凸点を省略することが望ましい。」との文章が追加された。

### (3) 凸点及び凸バーの寸法及び形状

旧規格では、凸点及び凸バーの高さの下限は0.3 mmとされていた。しかし、ISO 24503では、凸点の寸法は既存の海外規格に倣うものとされ、これによって下限が0.4 mmに引き上げられた。新JISも原則としてこれに倣うこととしたが、国内の現状を考慮し、「携帯して利用する小形機器の場合は、凸点の最小高さを、0.3 mmとしてもよい。」との記載を追加した。

## 3. 今後の課題

今回のJIS改訂作業では、国際規格の開発過程で変更された内容を、どの程度まで国内の規格に反映させるかが焦点となった。旧規格は、国内において10年以上活用されてきたものであり、改訂に消極的な意見もみられた。今後JISを作成する際に、国内のみならず国際的な事情も勘案した規格としておくことで、将来的に国際標準化が行われた場合にも、整合性の維持がスムーズに行われるであろう。同時に、アクセシブルデザインに関する日本の取り組みや成果を各国に積極的に伝え、理解を求めていくことが重要である。

みずの ゆ き こ  
(水野由紀子)



## 取って付き文鎮と30cm定規

兵庫県立リハビリテーション中央病院リハビリ  
療法部

（一社）日本作業療法士会 会長 なかむらはるき 中村春基



（一社）日本作業療法士会会長の中村春基と申します。この度、星川さんからご紹介頂き、インクルに初登場です。37年目の作業療法士ですが、今後とも宜しくご指導お願い致します。

勤務先の兵庫県立リハビリテーション中央病院は、医学的なりハビリテーションを提供する施設で、主に、大人の方々の社会復帰の支援を行っています。脊髄損傷、切断のリハビリテーションでは、全国トップレベルのサービスを提供できていると自負しております。また、昨年4月には、「ロボットリハビリテーションセンター」を開設し、今話題のロボットスーツ「HALL」などの臨床応用試験なども行っています。

\*\*\*\*\*

さて、作業療法は「人は作業をおこなうことで健康になれる」という、単純、明快な考の下、心身に障害をおもちの方々の応用的動作能力の改善と社会適応を支援して参りました。

37年間の作業療法を通して、仕事、趣味、地域活動などを主体的に行われている方々は、本当に「元気」です。そんな生活を送って頂けるよう、医学的な知識を基盤に、生活に密着した具体的な支援を行っています。

そんな中からうまれた「自具」をご紹介します。

片麻痺などによる片手動作を強いられている方が、紙に直線を引くことは、定規の固定が必要になり、出来ないと諦めている方が多くいらっしゃいます。「何とか線を引けないかなー」という患者さんの要望から生まれた品物です。

当院では30年以上も前から、OT室で使っているのですが、取手付き文鎮（特注）に30cm定規をくっ付けた物です。当時は、義肢装具開発課という部署があり、そこのエンジニアに特注

で製作して頂きました。それを基に、現在では、神戸市の民間製作所が製造しネット販売もを行っています。



（写真：取手付き文鎮（特注）に30cm定規をくっ付けた物）

昨年の国際福祉機器展HCR2012「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー 片手で使えるモノ展」で紹介があったかも知れませんが、なかなかの優れ物です。書字訓練での文鎮としての使用、ちぎり絵の和紙を折る、千切る作業では定規の鋭角な構造を実に上手に利用されています。その他、スプールウィービング（ジャンボ、リアン作成機とでもいいますか）の固定用具等々、片手の「ものを固定する」という機能の代償を、様々な場面で補完しています。退院時に購入して帰られる方もいらっしゃいます。

\*\*\*\*\*

作業療法を通して、出来ないと思われていた作業が、動作の工夫や簡単な自具を用いることで可能になることは多くあります。先に挙げた「文鎮付き30cm定規」などは、実にローテクな品物ですが、利用者にとって、なくてはならない「物」です。線を引くという簡単な作業の獲得は、「線」という成果に留まらず、多くの可能性を導いてくれます。出来ないと諦める前に、是非、作業療法士にご相談してみてください。

# 子どもが主役の町「キッザニア」

～E&Cプロジェクト(共用品推進機構の前身の任意団体)卒業生が語る!～

KCJ GROUP(株)経営企画室 しみずみえ 清水美恵

今回は、「E&C卒業生」として寄稿のお話を頂きました。「就職活動中の学生」としてE&Cに出会った私は、その後玩具メーカーを経て、キッザニアの立ち上げに携わり、今に至ります。

「専用品」ではなく「共用品」という考え方にならうならば、障がい児に対応する細かなマニュアルを持つのではなく、常に「子ども一人一人に合わせた対応」が取れるような意識を育てることが、「心のバリアフリー」につながっていると思っています。

—みなさんは、  
「キッザニア」をご存知ですか?—

ここは、子ども達が好きな仕事にチャレンジすることができる“子どもが主役の街”です。

館内は、子どもサイズのリアルな街。子どもの目線や体格に合わせた三分の二サイズながら、デパートや病院、警察署など、普段の生活でなじみが深い場所や街並みを忠実に再現しています。



(写真: キッザニア1Fの風景)

ここで子ども達は、自分で選んだ「仕事」の体験をしたり、お客さんとしてサービスを受けたりすることができます。また、体験ができるパビリオン(個々のお店のことを言う)には、実際にその仕事に携わる企業各社にスポンサーとして入って頂いていますので、使う道具や看板、仕事に寄せる思いや理念も、リアリティのあるものを提供していることも、特徴の一つです。

今回は、この「キッザニア」のバリアフリーについて、お伝えしたいと思います。

## キッザニアのバリアフリー

キッザニアのハード面については、全ての方がアクセスできることを前提に作られています。子どもサイズの小さなパビリオンですが、全て車いすで方向転換できることを条件に設計されていますし、2階に上がるエレベーターも完備しています。

しかし訪れるお客様にとって、ハードよりもっと大切なのは、子ども達に直接関わるスタッフの意識だと思います。スタッフ達は、自分たちが日々行っていることがバリアフリーだと意識している訳ではないのですが、一人一人の子どもの想いに寄り添うことを目指した結果、自然に「ソフト(心)のバリアフリー」が実現できるようになったように思います。

私が感じる「心のバリアフリー」について、具体的にどのようなものかをお伝えするにあたり、キッザニアが「子どもに寄り添う」ことをどのように受け止め考えているのかという想いを知って頂きたいと思います。



(写真: 子ども達に説明をするキッザニアスタッフ)



## 「自分で考えて自分で行動する」

キッザニアでは、来場くださる子ども達一人一人に対し、「自分で考えて自分で行動すること」を大切にしています。そのため、パビリオンの中に入ることができるのは、子どもだけです。

大人達は、街の通路から、大きな窓越しに子ども達の様子を「見る」ことはできても、手を貸したり助言したりすることはできません。

例えば食べ物を作る仕事であれば、仕事の制服を着る・手を洗って消毒する・作業台に移動し説明を聞く…、という一つ一つの準備を全て子ども達が自分で行いますが、この作業は大人が思っている以上に時間がかかります。

日常生活で時間の余裕があれば別ですが、急いでいる時など、3歳や4歳くらいのお子がおぼつかない手つきでこれらの作業をすると、見かねた保護者は手伝ってしまうことも多いでしょう。

しかしキッザニアでは、「子どもが自分でできる」ことを信じて、じっくりと待ちます。そして、「自分でできた!」という一つ一つの小さな成功体験の積み重ねを大切にしていきます。

## 「自分でできた!」

「自分でできた!」という自信をつけた子どもは、次はこれをやりたい、あんなこともできるかもしれない、と次のチャレンジに向かうことができます。

“自分で決めて”、“自分で行動する”、そして“自分の力でやりとげる”ことを経験し、達成感を味わうことで、キッザニアでの体験が“楽しい”と感ずることができるのだと思います。これは、障がいのある子ども達にとっても同じことです。

ここでは、一人一人、自分なりの形で“できた!”を味わうことができるよう配慮しています。

保護者の方による手助け(介助)が必要な場合には、パビリオンの中に入ってサポートして頂いていますが、スタッフで対応できる場合は外で待つ頂くことも多いです。

例えば、聴覚に障がいのあるお子さんの場合

は、比較的小子どもだけで体験頂くことが多いようです。

スタッフは筆談で伝えたり、ユニフォームのマスクをはずして話したり、覚えてたの手話を使ったり…と、考えつく限りの工夫をしながら、体当たりでコミュニケーションを取り、体験して頂いています。

## 子ども達からの嬉しいプレゼント

そして有難いことに、「最初は体験中じっとしていらなかった自閉傾向のある男の子が、何度も通ううちに仲良くなったスタッフの名前を覚えて呼んでくれるようになった」や、「聴覚に障がいのある女の子が、パンの生地をこねるうちに緊張した表情から生き生きした表情に変わり、キッザニアから帰る時にもう1度立ち寄り“ありがとう”と伝えに来てくれた」……など、スタッフにとってのご褒美のような、子ども達からの嬉しい反応も沢山頂いています。

## 一人一人に合ったサポートの実現

繰り返して言うまでもないかもしれませんが、このような対応は、障がいのある子ども達だけに特別に行っていることではありません。

中国語しか通じない時には身振り手振りや漢字の筆談でコミュニケーションを取ることもありますし、年齢が低く手助けが必要な子どもさんにかかりきりになることもあります。

どんな子どもであっても、一人一人が“自分でやりたい”という気持ちを持っていることを知り、その気持ちを尊重することができれば、自然と「必要なところだけをサポートする」姿勢が生まれると思うのです。これからもこの気持ちを持って、子ども達の「できた!」という表情に出会っていきたいと思っています。



(写真：バリアフリー住宅の提案のために車いす体験をしている様子)



## ■続ける重み

4月20日、大内進、猪平真理両先生を囲む会が行われた。両先生は、30年以上前、筑波大学付属盲学校から教諭をスタート。その後大内さんは、国立特別支援教育総合研究所へ、猪平さんは、宮城教育大学へと移り、一貫して視覚障害児の教育に従事されてこられた。この会は、お二人がこの3月での退官を期に催された。

32年前、私がトミー工業で視覚障害児の玩具開発の研究・開発をはじめてすぐに尋ねていったのが、東京都心身障害者センターと、この筑波大学附属盲学校幼稚部と小学部であった。

センターで紹介していただいた20名の盲児の家庭を訪問し、20家庭とも作ってほしいと言われた「しばらく音が止まらないボール」を試作し、アドバイスとモニターに協力していただいたのが、猪平先生であり大内先生であった。

国立の学校に、民間企業がのこのこ出かけていって、授業に上がり込み、しまいには子供たちと一緒に遊んで遊び、お母さん方との間もつないでくれたのがこの二人の先生であった。今から考えると、学校内部では民間企業の人間を、授業に参加させるとは、といった反対もあったのではないと思うが、そんなことは私に一言も言わず、一緒になってアイデアを考えてくれていたことを、囲む会に出席しながら思い出していた。

会も終盤、二人からの挨拶となった。大内先生からは、教育畑だけでない人達とのつながりで、広い視野で仕事ができたとの感謝と共に、一貫して研究を



星川 安之  
ほしかわ やすゆき

事務局  
だより

行ってきた目の不自由な人達への「触るミュージアム」構想が、この夏に視覚障害者のメッカである高田馬場に小さいスペースであるが、開館するという嬉しいニュースが発表された。スピーチの中で、その人脈の中に、共用品推進機構の名前も話して下さった。

一方、盲児への直接の指導からはじまり、次は特別支援教育の教諭を目指す学生の指導をしてこられた猪平先生は、「自分が、一貫して信じ、行ってきたことは、『子供たちは、自分で行える力をもっている、それを、子供たちに伝えること』でした」と、優しい顔で、優しい声で、スピーチを結ばれた。

その言葉を聞いて、32年前、私が取り組んでいた「盲児のおもちゃの開発」を、他の人からのネガティブな声を私に聞かせずに、「あなたなら、この仕事、できる力をもっているわよ」と、教えてくれていたのだと気付いた。

会がお開きとなり、二人と言葉を交わした。大内先生には「今後は少し時間ができるので、今までの研究を、共用品に生かしたい」と約束していただいた。

猪平先生とは、メロディボールを試作していた時の事で花を咲かせていたところに、メロディボールの試作で遊んでくれた当時4歳の女の子が、30過ぎの立派な女性になって訪ねて来てくれ、「あの試作のボール、その後も長いこと遊んでいた」ことを、嬉しそうに話してくれた。続けていると、時々、いろいろな御褒美がもらえる。

### 共用品通信

#### 【イベント】

(4月)

バリアフリー2013 (大阪、18~20日)

#### 【会議】

(3月)

第2回理事会 (4日)

第2回AD標準化・普及に関する標準化検討委員会

親委員会 (6日)

第9回展示会ガイド普及委員会 (13日)

第2回評議員会 (19日)

#### 【外部主催会議】

(3月)

第7回規格調整分科会 (14日)

JISC標準部会 (29日)

日本点字図書館 評議員会 (星川 27日)

#### 【講義・講演】

(4月)

女子美術大学講義 (星川、19日)

帝京科学大学講義 (星川、24日)

アクセシブルデザインの総合情報誌

## インクル 第84号

2013 (平成25) 年5月25日発行

"Incl." vol.13 no.84

©The Accessible Design Foundation of Japan  
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2013

隔月刊、奇数月発行

一般頒価 1部1000円

(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD-Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (公財)共用品推進機構  
郵便番号 101-0064  
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F  
電話: 03-5280-0020  
ファクス: 03-5280-2373  
Eメール: jimukyoku@kyoyohin.org  
ホームページURL: <http://kyoyohin.org/>

発行人  
事務局

鴨志田厚子  
星川 安之  
森川 美和  
金丸 淳子  
水野由紀子  
松岡 光一  
三好 泉  
田窪 友和

執筆・協力 (五十音順)  
石崎奈保子  
清水 美恵  
関戸 菜美  
高橋 玲子  
中野奈津美  
中村 春基

印刷・製本 ベスト・イーグル(株)  
サンパトナース(株)

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、(財)共用品推進機構までご連絡ください。

上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。